



生命環境科学系

系長 長谷川寿一

生命環境科学系は、広域科学専攻の中で文字通り生命科学にかかわる研究室の集まりです。大講座としては、環境応答論、生命情報学、生命機能論、運動適応科学、認知行動科学の5つに分かれています。実質的なサブユニットとしては、基礎生命科学（専任教員36名）、身体運動科学（同21名）、認知行動科学（同5名）の3つのグループを単位として研究と教育を行っています。さらに、学外の客員教員（2名）と学内の兼任教員（5名）が加わって専門教育に幅を持たせています。今年度からの兼任教員としては、医科学研究所の大海先生と生産技術研の竹内先生をあらたにお迎えしました。また、今年度からは系間協力教員という新制度がスタートしました。これは広域科学専攻内の他系で生命科学を専門にされている方にも、研究指導を担当していただく制度で、さっそく関連基礎科学系の酒井先生と広域システム科学系の増田先生にお力添えをいただくことになりました。こうして、本系はこれまで以上にカバーする専門領域を広げ、学内のみならず全国的にみてももっとも広範、かつ強力な生命科学のコースに拡充できたと自負しています。生命環境科学系が二つのCOE（「融合科学ステーション」「心とことば—進化認知科学的展開」）のベースになっていることから、日本の生命科学の総合的な拠点であることがわかりただけだと思います。

ノーベル医学生理学賞を受賞したニコラス・ティンバーゲンは、動物行動研究には4つの設問の立て方があると述べました。それらは「メカニズム（機構）」「発生（発達）」「適応的意義（機能）」「進化」の4つですが、行動研究にとどまらず、生命現象すべての研究において重要な視点だと言えるでしょう。私が専門にする行動生物学では、かつては行動と生態の記載や観察が中心でしたが、いまや行動を制御する遺伝的基盤抜きには研究は語れません。もちろん、進化という生命の歴史性を考慮せずに行動を理解することはできません。また、発生生物学においては、近年、エピジェネティックな視点が急速に導入され、遺伝子、発生、機能、進化が統合的に語られるようになってきました。現代の生命科学は、専門化、細分化が進む一方で、統合的視点なくしては済まなくなっているのです。このような時代であるからこそ、研究領域としては分子から細胞、組織、器官、個体、行動・認知、生態までをカバーし、研究対象としては原生動物から人類まで幅広く扱う生命環境科学系のような研究・教育組織が時代の要請として求められています。昨年、とあるシンポジウムで出会った生命環境科学系のOBの方は、今、科学と社会の橋渡しをする仕事につかれています。が、大学院時代の領域横断的な教育が大変に役立っていると話してくれました。非常に嬉しい話でした。

生命環境科学系では、入試のあり方やカリキュラム、修士・博士論文の審査の方法や体制を不断に見直しながら、よりよい研究・教育環境の発展と整備を目指しています。来年度もまた、希望に燃えた多くのフレッシュな人材を迎え入れられることを心より願っています。